

機関番号：15101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720225

研究課題名（和文）都市—農山村関係の社会ネットワークに関する地理学的研究

研究課題名（英文）The Geographical Study on Social Network of Urban - Rural Relation

研究代表者

筒井 一伸（TSUTSUI KAZUNOBU）

鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号：50379616

研究成果の概要（和文）：本研究は、近年、政策的に関心もたれている都市と農山村の「協働」を目指した「都市-農山村交流」に着目して、その地域アクター間の関係性把握の方法を検討し、この関係を社会ネットワーク形成に結び付ける際の問題点を考察した。その結果、地理的特徴が異なる地域アクターに共通するミッションと、形成された社会ネットワークとしての関係を持続的に運用する体制とを、どのように構築するかが課題であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：Recently, it is politically active that “Urban - Rural Exchange Programs” which aim at “collaboration” with community development. This study focuses on this movement and issues the activation of urban - rural Relationship for formation of social network. Results of this study indicate two difficulties for maintaining this relationship as a social network; one is a difficulty of creating a common mission between actors who have different geographical characters, and the other is a difficulty of managing the system in a sustainable way.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：農山村，地域間交流，社会ネットワーク，地域づくり，SWOT，都市住民

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、都市-農山村関係の地域政策は「ネットワーク」と「交流」をキーワードに展開されてきた。道路網などの「ハードのネットワーク」構築に加えて、都市住民の農山村へのフローを誘発して都市-農山村関係を拡大する「都市-農山村交流」も主要政策として位置づけられてきた。後者の目的は経済的効果を求めるばかりでなく、都市住民の農山村への理解を促進するなど、非経済的

効果も視野に入れられてきた。この都市-農山村交流は前述の「ハードのネットワーク」構築に対して「ソフトのネットワーク」構築と位置づけることができる。21世紀に入り過疎、高齢化が加速度的に進行した結果、地域づくりや地域活動の担い手不足がこれまで以上に深刻な農山村において、都市住民の農山村への社会的認知を通じてソフトのネットワークを構築し、その結果、都市住民が農山村の地域づくりに参画することが期待さ

れている。

しかしながら、地域づくりの現場においてはこれまでの都市-農山村関係の検証や問題把握など、新しいソフトのネットワーク構築の基盤となる知見が求められているにもかかわらず、農山村もしくは都市の一方に立脚した、静態的な検証、把握がその多くを占めており、必ずしも関係論的視点から総合的に把握されてきたわけではなく、今日的課題である新しい都市-農山村間のソフトのネットワーク構築に資する知見は必ずしも十分ではなかった。

## 2. 研究の目的

本研究は、このような背景の下、都市-農山村交流をはじめとする「ソフトのネットワーク」を対象に、それに関わる地域コミュニティやボランティア組織などの地域アクターの関係を社会ネットワークして位置づける。そしてその社会ネットワークの形成などにおける問題点を明らかにした上で、地域政策的意義の再検討を行うことを目的とする。

## 3. 研究の方法

分析枠組みや視点として「社会ネットワーク論」を導入した。本研究の具体的対象である地域コミュニティやボランティア組織などの地域アクターの関係性把握にも有用な視点であると考えられる。

本研究では福島県川俣町、岡山県高梁市、熊本県小国町、宮崎県高千穂町などにおいて聞き取り調査を中心とするフィールド調査を行い、都市-農山村交流やそれに関わる地域アクターの全体像を明らかにした。このインタビュー調査などで得たデータを、SWOTマトリックスを援用した地域アクターの関係性整理ツールを用いて、その実態把握を行った。さらに地域づくりに中心にかかわる農山村の地域マネージャーや、都市-農山村交流を通じて農山村の地域づくりに参画する都市住民を対象としたワークショップを開催し、地域アクター間のマッチングについての地域政策的意義について検討を行った。また地域アクター間の相互関係について、より詳細に解明を行うため農山村地域の地域づくりに関わる地域アクターを対象としたアンケート調査を実施した。

## 4. 研究成果

### (1) 成果の主な成果

①聞き取り調査や既往の資料の精査から都市-農山村交流のトレンドを整理した。1990年代以降グリーン・ツーリズムなどの台頭により人の受け入れによる直接的な経済効果を目的に展開されてきたが、2000年代に入り、都市-農山村交流はツーリズム的な直接的な経済面での効果のみならず、都市住民の農山

村へのフローを誘発することにより社会的相互認知を促進し、都市と農山村との「協働」を目指す都市-農山村交流が展開されていることを明らかにした(図1)。

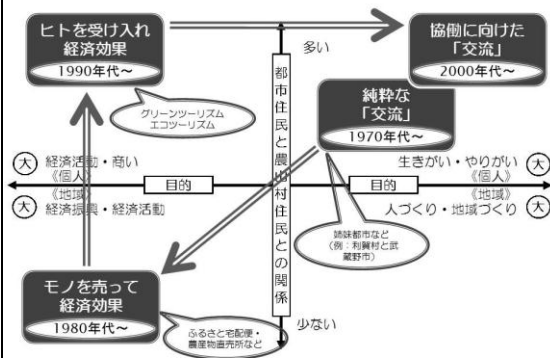


図1 都市-農山村交流のトレンド変遷

このような「協働の段階」の都市-農山村交流については、近年、国レベルの本格的かつ大規模な施策が動きはじめた。総務省の「集落支援員」や「地域おこし協力隊」、農林水産省の「田舎で働き隊！」がそれであり、都市の若者の農村への流動を「政策的」におこそうという動きである。都市の若者と農山村をつなぐこれらの政策は、ヒト、ムラ、土地の疲弊と硬直化にさいなまれている今日の農山村が、新たな地域づくりへの一步を踏み出す大きな可能性を有しているが、実際にこれらの施策に取り組んでいる都市の若者も、農山村の住民も、どのような関係を創り、どのように交流していいのかは手探りで挑んでいる現状が明らかになった。

②①で明らかになった「協働の段階」の都市-農山村交流においては地域アクター間の関係が重要であり、都市、農山村の地域アクター間の社会ネットワークを形成するために、「地域マネージャー」が地域アクターそれぞれの志向性や特徴を的確に把握し、わかりやすく整理できるかが課題となっている。そのため、研究代表者および研究協力者らは別途の研究プロジェクトにおいて、都市、農山村のそれぞれが持つ「強み」の要素と「弱み」の要素を明確に把握し、それらが相互に補完しあう地域アクター間の関係を整理するツールの開発をSWOTマトリックスを参考に行った。SWOTマトリックスは、一つのアクターの内部環境と外部環境の関係性を明示することを目的としているが、外部環境の代わりに別のアクターの内部環境を配置することによって二つのアクター、すなわち都市(Urban)のアクターの持つ強み(Su)、弱み(Wu)と農山村(Rural)のアクターが持つ強み(Sr)、弱み(Wr)の関係性を整理して、明示するものである(図2)。

		都市の地域アクターの	
		強み (Su)	弱み (Wu)
農山村の 地域アクターの	強み (Sr)	促進	補完1 (農山村→都市)
	弱み (Wr)	補完2 (都市→農山村)	課題

図2 地域アクターの関係性整理ツール

このマトリックスにおいては、Su×Srで「促進」の関係、Su×WrおよびWu×Srで「補完」の関係が把握できる。前者では農山村のアクターが都市のアクターを補完している関係（補完1）が、後者は都市のアクターが農山村のアクターへ補完している関係（補完2）があらわされる。最後にWu×Wrでは地域アクターそれぞれの弱みの要素があらわされることから「課題」発見が可能となる。この整理ツールにフィールド調査で得られたデータをあてはめ、関係性把握を行った。

③②の整理ツールを用いた関係性把握の過程で、都市-農山村交流を通じた社会ネットワークの形成についての論点が生まれてきた。具体的には都市の若者が農山村に入って交流する事例が増える中で、この状況を社会ネットワーク形成に結び付ける際にどのような課題があるかなどである。そのため地域づくりの実務者や農山村の地域づくりに参画する都市の若者など41名に参加してもらったワークショップを2010年12月11日に開催し、より具体的な課題抽出を行った。図2のWu×Wrに従い、都市の地域アクターと農山村の地域アクター、それぞれの弱みを抽出することで課題を明らかにした。その結果、都市と農山村という地理的性格が異なる地域アクターに共通するミッションを構築することの困難さなどが明らかになった。またこの地域アクター間では緩やかな社会ネットワークが形成されつつあるが、それを持続的に維持する体制をどのように構築すべきかと、いう点についても課題として明らかになった。

④③のワークショップにおける議論の知見から、社会ネットワークを政策的に形成・維持しようとする動きを実際に取り仕切る「地域マネージャー」の社会ネットワークにも着目した（図3）。

それを明らかにするため都市-農山村交流に関わる都市側、農村側双方の地域アクターを対象としたアンケート調査を実施した。社会ネットワークに関わる突っ込んだ設問が多いため調査対象を事前に同意が得られた37名に限定し、内22人から有効回答を得た。その結果、都市、農山村双方の地域アクターの社会ネットワークを政策的に形成・維持し

ようとする動きを実際に取り仕切る「地域マネージャー」は、その知見やスキルなどの影響を受ける社会ネットワークでは居住市町村内よりも居住市町村外への広がりの方が大きい一方で、実際の活動を共にする社会ネットワークを居住市町村内でしっかり保持している傾向が読み取れた。

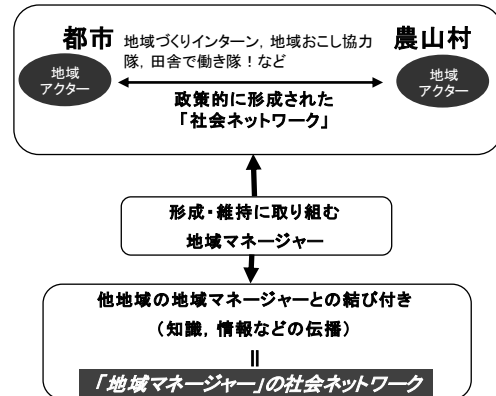


図3 地域マネージャーと社会ネットワーク

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究で明らかになった点は、上記(1)の項にまとめられたとおりである。(1)①に関しては図書②や雑誌論文①②、(1)②に関しては学会発表①や雑誌論文③④、(1)③については図書①として公表した。国内の地理学レフェリー誌での公表のみならず地理学の国際学会への投稿、さらに村落社会学関連の学会発表、農村計画学関連の学会誌での発表などその成果は国際的、学際的に広がりを持つよう心がけており、その結果として社会一般にも関心もたれるようになってきている。特に図書①は研究成果を中心に一般向けに平易な文章で公表したことによって、学界のみならず地域づくりの現場でも注目され、全国町村会の会報誌『町村週報』第2733号でも取り上げられた。これらの点は評価できよう。

(3) 今後の展望

本研究で得られた知見のうち、特に(1)④で述べた「地域マネージャー」の社会ネットワークについては、その形成過程の解明やそこから得られる政策課題の抽出など今日的課題に直結する、今後展開すべき研究テーマである。

政策的にはますます強調され、もはや地域運営における必要条件になった感がある「地域の自立」であるが、社会経済基盤の弱い農山村地域では「地域の自立」を担うマネジメント主体の形成が急務となっている。制度的には行政が主導する形で「まちづくり協議会」や「地域振興協議会」などの地域運営組織が設置されてきたが、加速度を増しつつあ

る人口減少・高齢化という「人の空洞化」から十分な組織形成を行うことができず、地域運営組織に期待されている「むらの空洞化」に対応する地域活動のマネジメントの役割が十分に担えていない実態がそこにはある。

このような実態を踏まえて、本研究に続く新たな研究テーマとして「農山村型エリアマネジメント」に関する研究がある。組織としての「地域運営組織」の課題、例えば「地域運営組織」が対象とするエリア（空間領域）の設定がマネジメントを行う上で適しているかなど、について検討を行うとともに、「地域マネージャー」の社会ネットワークの実態と形成過程の解明も継続して行う必要がある。組織として「地域運営組織」を捉えるにせよ、地縁などの影響が大きい農山村地域においては個人としての「地域マネージャー」にまでスケールダウンしてその実態を解明しなければならない。すなわち農山村における広義の「エリアマネジメント」に関して、その空間、組織、主体に着目して研究を進める必要があるといえる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

①筒井一伸・澤端智良(2010)「外国人観光客を対象としたグリーン・ツーリズムの可能性と課題—マーケティング分析の視点から—」『E-journal GEO』5(1), pp. 35-49. 【査読有】

②TSUTSUI, Kazunobu 2010, “The concept of Rural tourism in Vietnam”, Understanding the Changing Space, Place and Culture of Asia (The 10th International Conference of Southeast Asia Geography Association). pp. 509-515. 【査読有】

③佐久間康富・岡司直也・筒井一伸・海老原雄紀(2010)「都市農村交流における主体間関係の整理ツールの開発」『農村計画学会誌』29(4), pp. 473-481. 【査読有】

④筒井一伸・海老原雄紀・岡司直也・佐久間康富(2008)「地域づくりインターン事業に関わる主体の特徴—福島県伊達郡川俣町における調査報告—」『地域学論集』5(2), pp. 85-96. 【査読なし】

①の電子ジャーナル URL

[http://www.jstage.jst.go.jp/article/ejge/5/1/35/\\_pdf/-char/ja/](http://www.jstage.jst.go.jp/article/ejge/5/1/35/_pdf/-char/ja/)

〔学会発表〕(計1件)

①筒井一伸・佐久間康富・岡司直也・海老原雄紀「協働の段階にある都市-農山村交流の捉え方—地域づくりインターン事業を事例として」日本村落研究学会西日本地区研究会(2009年8月29日, 龍谷大学).

〔図書〕(計2件)

①宮口侗迪・木下勇・佐久間康富・筒井一伸編著(2010)『若者と地域をつくる—地域づくりインターンに学ぶ学生と農山村の協働—』原書房, 237p.

②筒井一伸(2008)「農山村の地域づくり」(所収 藤井正・光多長温・小野達也・家中茂編『地域政策入門』ミネルヴァ書房) pp. 191-209.

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

筒井一伸 (TSUTSUI KAZUNOBU)

鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号: 50379616

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

佐久間康富 (SAKUMA YASUTOMI)

大阪市立大学・工学研究科・助教

研究者番号: 30367023